協働推進室に臨時職員が着任

近田秀樹さん

前号で触れましたが、「地域振興中核施設」の指定管理を『WAO！』が担う為に、様々な準備が必要です。この施設は、「住民の社交の場であり、かつ来訪者にとっても楽しい集客の拠点であり、地域情報発信源となる」よう、色々な機能を有することが必要です。具体的な、機能としては、左のような施設が考えられます。

観光案内所　広報室　集会室　ホール
ギャラリー　レストラン　喫茶店　直売所
バスロータリー・バス待合所　JR改札　等

これらハード部分の建設等は、南房総市が担当する訳ですが、その管理や運営を、『WAO！』が行おうとするものです。

建設と管理・運営とは、計画段階から相互に関連した部分が多くあります。ですから、その準備も当然「南房総市」と『WAO！』が、協働で進めることになります。近田さんは、その準備をより良く進めるために加配されました。

南三原公民館の解体作業始まる

平成２３年１０月２０日撮影

市の行財政改革の一環として、施設や機構の再編が行われていますが、南三原公民館も、その機能が「やすらぎ」に移され、旧建物は取り壊されることになりました。

その工事が、10月中旬から始まっています。また工期は、23年12月15日までとなっています。

公民館跡地の活用の仕方については、現在検討中です。また、県から借用している「駐車場用地」は返還し、防風林に戻すことになります。

小学生が天畑で植栽

取材を受ける辻会長

10月20日、天畑保存会が春咲きの花の植え付けを行いました。植えた花苗は、キンセンカ千数百本です。

植え付けに当たっては、和田小学校の4年生10名、南三原小学校の4年生15名が参加し、お手伝いをしました。

まずはじめに、子ども達は会員から、苗の植え付け方を教わりました。次に、それぞれの分担場所に分かれ、作業を行いました。その後、子ども達はペットボトルで、植え終えた苗にていねいに水遣りをしました。やはり、人数が多いことは、作業時間を短くします。1時間程度で作業は終わり、子ども達は最後に会員から、用具の使い方などを教わりました。

今、天畑には菜の花とキンセンカが植栽されています。また花木類では、花桃や河津桜等も植えられています。春には、これらの花々が一斉に咲き揃い、美しい景観を作り出してくれることでしょう。天畑の来春が楽しみです。

植え付けの仕方を聞く小学生

用具の使い方を教わる小学生

苗の植え付けをする小学生

発行者　南房総市・NPO法人和田地域づくり協議会『WAO!』
連絡先　南房総市役所和田支所内　地域づくり支援員
電　話　支援員　0470－47－5955
　　支　所　0470－47－3111
E-mail　qq4u9y89n@royal.ocn.ne.jp

だいすき和田
平成23年1月10日
第27号
NPO法人和田地域づくり協議会『WAO!』
WADAISUKI

ビーチクリーン活動を一緒にしませんか！

８月７日のビーチクリーンの様子

８月７日のビーチクリーンの様子

８月７日のビーチクリーンの様子

月の第1日曜日　8時開始

前号で紹介しましたように、『WAO！』サーフィン・プロジェクトは、「和田地域のサーフィンに適した波や美しい海岸環境を資源として捉え、外来者と地域住民とがそれらを有効に活用し、共生できるような事業」を進めようとしています。

その一環として、毎月第1日曜日、白渚海岸でサーファーと共にビーチクリーン活動を行っています。

8月は7日、9月は4日、10月は2日に行いました。8月と10月の様子を写真と文でお伝えします。ちなみに、8月は18人、10月は15人の参加がありました。

リーダーの信川さんの↙報告を基にお伝えします。

震災後、参加者が少なくなりましたが、半年が経ち、ビーチクリーンに参加するサーファーの数も戻り、子供やワンちゃんを連れて参加する家族もありました。加えて、地域に暮らす若い世代のサーファーが今回も参加してくれたことに感激しました。2回とも台風の影響で、多くの漂着ゴミが堤防近くまで打ち上がっていました。

しかし、多くなった協力者のお陰で、思ったより短時間で、目立ったゴミは回収できました。実のところ、竹や流木などの燃やせる自然ゴミを焼却できれば、もっと景観の良い砂浜になるし、不法投棄しづらい環境になるのではと考えますが、現状では難しい状況です。

拾い集めたゴミは、ペットボトル・缶・ビンなどに仕分けして『WAO！』メンバーのトラックに載せ、指定されている廃棄物置場まで運搬しています。

相対的に見ると、地元の方々の協力も少しずつ増えてきました。海へ向かうサーファーも足を止めてゴミを拾い、ゴミ袋を持っている私達の処へ持ってきます。「和田サーフィンクラブを中心に、11年間続けてきた努力の積み重ねが実を結びつつあるな」と感じます。

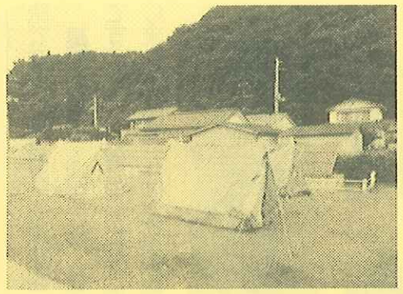
しかし、ビーチクリーン参加者が車で来た場合、駐車スペースが少ないのが現状です。より多くの方が参加して頂けるよう、現在、駐車場確保の努力中です。

10月２日のビーチクリーンの様子

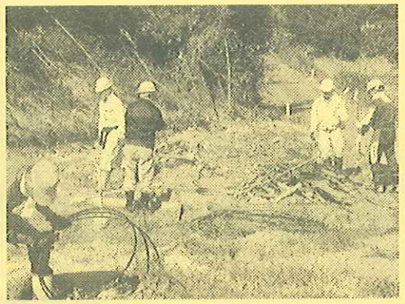
地域の皆さんも是非ご一緒に！

10月２日のビーチクリーンの様子

10月２日のビーチクリーンの様子



『WAO!』のメンバーが石巻の災害復興ボランティアに参加しました



10月11日から13日の3日間，『WAO！』の会員3名が，「南房総市地域づくり倶楽部」の主催する「災害ボランティア研修」に参加しました。

活動場所は，宮城県石巻市鮫浦（さめのうら）浜という所です。鮫浦は牡鹿半島の太平洋側に面していて，周辺の入り江にあった小集落共々，津波による壊滅的な被害を被っています（読売新聞 10月24日第33面 参照）。

ボランティア活動の日程はハードなもので，11日朝に出発，夕方に現地到着，車中泊。

2日目が丸1日活動日，そのまま車中泊。

3日目は気仙沼市等の現状視察後帰路へ，というものでした。

狭い車中での2泊は，参加者にとって参加者の疲労を回復させることにはならないため，駐車場付近にテントを張り1日交替で睡眠をとりました（それでも大変）。

ボランティア活動の様子や所感は，参加者自身の体験報告文で紹介します。

「何百年に一度と言われるこの自然災害を，そのうちに見てみたい」それが今回，私がボランティアに参加した動機です。

実際，視察した被災地は，どこも無残な状態でした。特に南三陸町はじん常ではない酷さで，入った瞬間から何か異様な雰囲気を感しました。市街地や住宅地だった所は，ことごとく被害を受けていました。そして，多くの建物が取り壊された後は，人影は少なく，土台だけ残された土地が荒野のように広がっていました。

海の方には，幅百メートル，高さ十メートルくらいの黒ずんだ小山が，幾つも出来ていました。そしてそれが，被災した家の建築材や鉄筋の残骸だと分かった時，がく然としました。また，つぶれた車が何百台となく，他の一角に積まれていました。「あっ，ここに本当に巨大な波が襲って来たんだ・・・」と，初めて津波の恐ろしさが伝わって来ました。残骸の山の空には，暗たんとした重い空気が漂っていました。

陸前高田も同様でした。こちらの方が被災した範囲は広く，市街地周辺が一平方キロ以上にわたって取り壊され，無機質な平地が見渡す限り続いていました。それでも，傾いたり，破損した建物があれば被害状況が想像し易いのですが，ほとんどの建造物が取り払われているので，何ともその全容が掴みにくい感じです。南三陸町より撤去作業が進んでいる分，「本当にここに人間の営みがあったのか」と，ポカンとしてしまうような状況でした。

津波の真実を知ってしまった今，あまりにも大きな課題が見えてきました。

本当は，私の家は，現在の場所から引っ越さなければならないこと。でも，そんな金はとてもないこと。同じ場所に住み続けるとしたら，地域の高台に鉄壁の避難場所を造らなければならないこと。老人や病人がそこへ早く行けるよう，避難路を整備しなければならないこと。何より，地域の住民や行政，関係機関とが連携して，万全の避難体制をつくっていかなければならないこと。ひいては，政府が法令や予算措置を以て，津波の避難体制を整備するよう，国中に働きかけなければならないことなど。

例えそういう災害の場面がこなくとも，それに対してあらかじめ備えをしておくことが，日々の安心を支えるのだということも，気づかされました。よく，今回の震災は「想定外」とか，「予想を超える大きさ」とか言いますが，自然がいざとなると桁はずれの猛威を振るうということが分かった今，その「まさか」が起こった時どう対応できるか，そのために何をしておくべきか，日本人の人間力が，今こそ問われているのだと思います。

岡田　康弘

被災地に入って，まず感じたのは，とても海が静かだなあということ。また，私が勝手に想像していたよりも，復旧が進んでいないということ。まるで，大地震がほんの数日前の出来事のように，散乱した様々な生活のかけら達が，手付かずのままになっている場所もありました。

二日目，牡鹿半島の鮫浦（さめのうら）という地区で，がれきの撤去作業をしました。そこは，住宅の基礎部分だけが残っていて，一面が津波で運ばれた砂に埋もれています。片隅には，線香が手向けられた跡もありました。

木くず，衣類，漁網，ガラス片，トタン板，包丁，電線，食器，便器，瓦，タイルなどなど，手作業で拾い集め，時には砂の中から掘り出してそれらを分別します。人の力では，動かせないようながれきも沢山あり，近くで数台の重機が作業していました。被害の範囲があまりにも広大で，数人での手作業など，無意味に近いような無力感もありましたが，少しずつでも片付けていかなければ，前へ進みません。ただただ，やるしかないのです。

ボランティアの受け入れ側の方の話では，新しい町づくりの見通しが未だ定まっていないことが，復旧作業の遅れの一因であり，また，人も重機も，まだまだ足りないとのことでした。正直，元の状態を知らない私ですが，『復旧』というのは，とても困難な事業だと感じました。

一方，『復興の兆し』という面では，仮設住宅や，仮店舗という看板のもと，営業を再開しているお店をあちこちで見かけました。

三日目は，特に被害の大きかった気仙沼や，南三陸，陸前高田を視察で訪れました。被害の様子を目の当たりにすると，改めて津波のエネルギーの大きさを思い知らされます。どんなに高い堤防を作っても，どんなに丈夫な建物を建てても，自然の力にはきっと遠く及ばないことでしょう。とにかく逃げる。生き残るにはそれしかないと，強く強く感じました。家族間で，また地域住民全体で，「とにかく逃げるんだ」という共通の認識を持ち，いざという時にお互いを信じて行動できれば，少しでも被害を少なく出来るのではないかと思いました。

長島　富郎

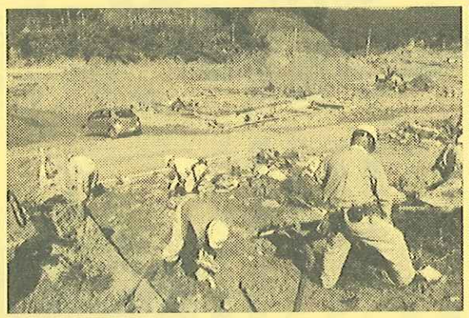
実際に作業を行ったのは，牡鹿半島の鮫浦（さめのうら）という地区で，和田と同様に捕鯨基地のある鮎川から車で30分ほどの所です。作業場所等の受付をするために訪れた牡鹿公民館の階段を上がると，ちょうど1階と2階の間に津波で浸水したあとが残っており，電気も発電機で供給している状態でした。

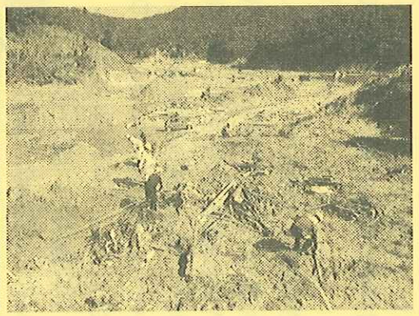
現場での作業内容は，手作業でのがれきの撤去でした。作業をしながら斜面を登りきると，そこには，建物で唯一残っている神社があり，そこから見渡す鮫浦湾は，陸地の壊滅的な様子とは対照的に何事もなかったように穏やかだったのが印象的でした。

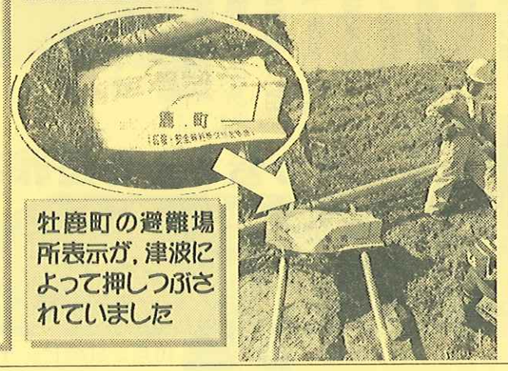
作業を終えて公民館に戻ると，毎週水曜日に行われている牡鹿復興市場が開かれており，ほんの少しですが，復興への兆しを感し取ることができました。

今回の研修により，自分の目で見たことや，肌で感じたことを忘れずに，今後の活動に生かしていきたいと考えています。

平嶋　太







牡鹿町の避難場所表示が，津波によって押しつぶされていました

現在，和田コミュニティセンター（和田支所）のロビーに，震災直後と現在の現地の状況，ボランティア活動の様子を撮った写真が展示してあります。

ご来所の際には，是非ご覧下さい。